

アユ釣りの記録からたどった釣果の変遷

Changes in the Performance of Ayu Angling Tracked from a Personal Diary

山本敏哉

Toshiya YAMAMOTO

1. はじめに

アユ釣りの名所として知られた矢作川であるが、アユが釣れないといわれるようになってから久しい。ここでは、古岸地区を中心にして長年にわたってアユの友釣りを記録してきた人の詳細な日記をもとに、1980年ごろから現在に至るまでのアユの釣果と川の様子の変化をまとめてみた。

2. 釣りの記録の概要

釣りの記録をおこなったのは、豊田市扶桑町在住の村山志郎氏（豊田市矢作川研究所の幹事および渉外担当）である。記録は、氏がアユ釣りをはじめた1979年から1999年の20年間にわたってなされている。アユの釣果に関しては、釣りに行った日の釣れたアユの個体数、釣った時間帯、および若干のコメントが付けられている。釣りを行っている場所は、在住地そばの古岸地区が最も多いが、その他にも、上流の有間、小渡、時瀬地区や、矢作ダムより上流の上矢作、さらには豊川水系の数カ所でも、まとまった回数の釣りの記録がある。

これとは別に、釣りをしてきた中での川の様子の変化も記述がなされている。古岸地区においては、河床、岸辺、糸状藻類、アユの釣れ方の変化が述べられている。それ以外では、古岸地区より上流の流域と、古岸より下流の上の山土場について、他河川として大入川と豊川について、それぞれ要点が記述されている。

3. まとめ方について

まず、古岸地区の川の変化の様子を、記述をもとに時間順にまとめた。次に、アユの釣果が激減したと述べられている時期で区切って、その前後で実際に釣果がどれくらい変化したかの把握を試みた。なお、この比較において、アユ釣りを始めてから最初の2年間は、技術的な未熟さが釣果に少なからず影響していると推測された(村山, 私信)。このため比較には1981年以降の記録を用いた。また、調査時間については、時間数が記載されている場合もあるが、「午前」「午後」や記載のない場合も少なからずみられた。そこで、村山氏に確認をとったところ、前者の場合は5時間、記載のない場合は全日で8時間程度の釣り時間とのことで

あったので、それに従って釣果の評価をおこなった。

4. 記述でたどる古岸地区における川の変化

以下は古岸地区について記された川の変化の要約である。

1) 友釣りでのアユが掛かった時のアタリが変化

1980年代の半ばよりアユが掛かった時の手応えが変化した。それまでは、最初に「ブルブル！」または「ブルッ！」という手応えがあり、一瞬の間があって「キューン！」と走る具合だったのが、ある年から「ブルッ！」がなくなり、いきなり「キューン！」がくるだけの反応になった。また昔に比べると、とにかく激しい走りがなくなった。弱くなった。

2) ハミ跡の変化

1980年頃は、河床の石はすべてピカピカになめてあった。それが1985年頃から減り始め、現在まで一向に回復の気配がない。

3) 河床の硬化

1984年ころより河床が固くなり始めた。はまり石が増加したためである。それまでの5年間くらいは、河床がやわらかいために、瀬に立ち込んで釣りをしていると、足元がどんどん掘れていった。3分ぐらいごとに足場を変える必要があった。また、石が浮いた状態で河床も小刻みに縦横に変化していた。それが1984年頃より2~3年間ぐらいで次第に固くなり、河床の変化も緩やかで小刻みな変化はなくなった。そして、現在では何時間立っていても足元は掘れない。

4) 糸状藻類の異常発生

糸状藻類を最初に目にしたのは1990年の3月上旬であった。矢作川での大発生はここが最初である。それが2ヵ月サイクルで消長をするという現象により、5月は一旦消えたが、解禁が迫るにつれ伸びだし、アユ釣りの解禁の日には大繁茂の状態となった。それ以後、糸状藻類はどこかにあるという状況だが、異常な長さになったのは1990年からの数年間である。その後は短い状態が多い傾向にある。

5) オオカナダモの大繁茂

異常発生は1994~1995年に始まった。それ以前にも、自然水制の水裏のゆるみで繁茂していたが、そこから他に展開する様子はなかった。それが、あふれ出すようにして下流に展開を始め、瀬では大きな群体をつくらず点在した状態でふくらむという形になり、ドブでは何十~何百平方メートル以上という群体をつくり、さらに勢いを増している。しかしながら、古岸より上流ではまだ繁茂がみられない。糸状藻類にも同様な傾向が見られ、両者には連動した要因が働いているのかもしれない。

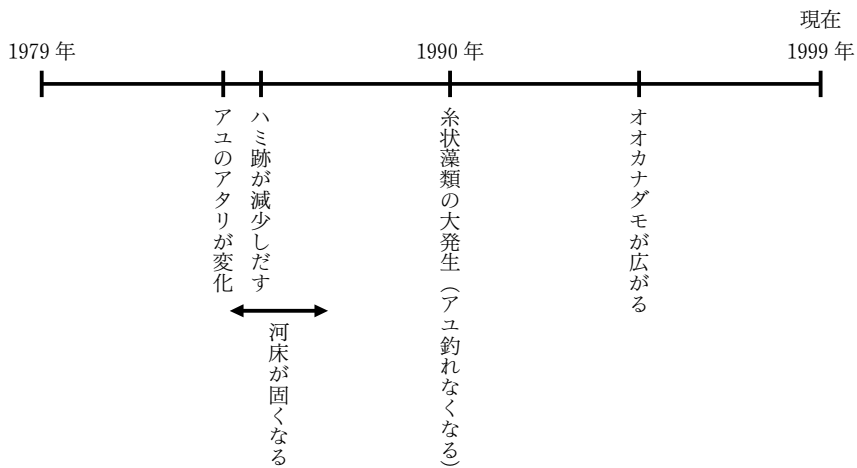


図1 古岸水辺公園で観察された川の様子の変化

上記の変化を年表に示したのが図1である。なお、アユが釣れなくなり始めた時期は釣果とそれに記されたメモから、1990年と推測される。

5. アユ釣果の変化

ここでは、アユの釣果の変化を、1990年以前と以後との比較を中心に述べる。

図2では、古岸ほか4ヵ所での1時間あたりの釣果を縦軸に、日を横軸にとってプロットしている。これより、古岸地区でみると、中を塗りつぶした1990年以降の釣れた尾数が明らかに減っていることが読み取れる。また、大入・上矢作でも同様の減少がみられる。一年前の1989年の結果は白抜きの三角で示しているが、目立った釣果の減少は生じていない。一方の小渡・時瀬、有間・百月および上の山土場では、前2者については1990年以降の記録が、後者については1980年代の記録がほとんどないために、比較することができない。なお、季節的には、大入・上矢作、小渡・時瀬と古岸においては、夏さらに秋へと進むにつれて釣果が増加する傾向がみられている。

次に、1980年代と1990年代の平均の釣果を図3に示す。まとまった数の記録がある大入・上矢作と古岸では、双方とも有意に1990年代の方が減少するという結果になっている。その減少の大きさも、4割程度と類似している。地点間の比較では、1980年代の矢作川では、小渡・時瀬→有間・百月→古岸と、上流から下流の順で釣果の減少がみられる。ただし、古岸より下流の上の山土場では、1990年代の釣果は同年代の古岸を上回り、1980年代のそれに匹敵する水準となっている。

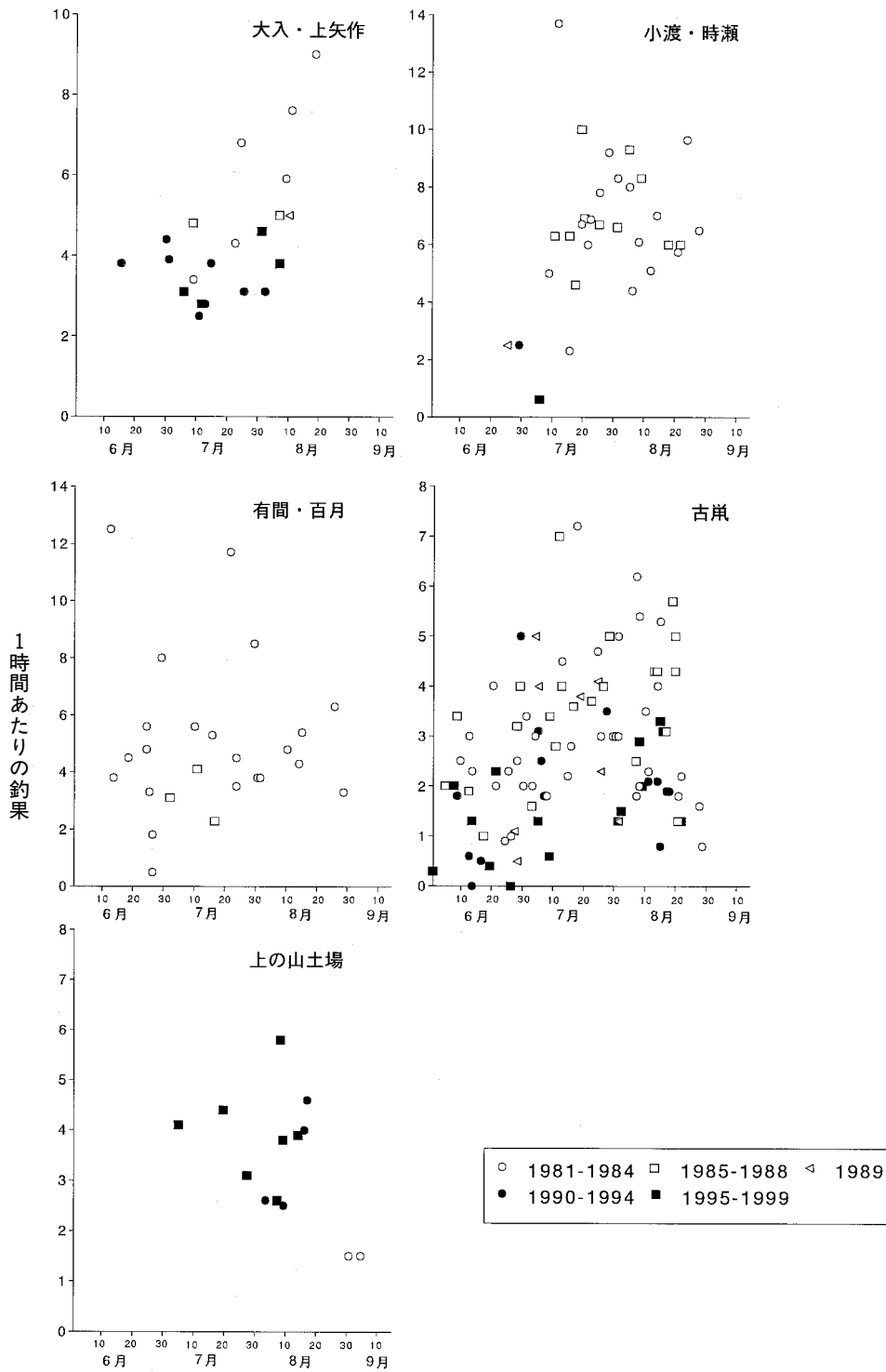


図2 5カ所における釣果の散布図

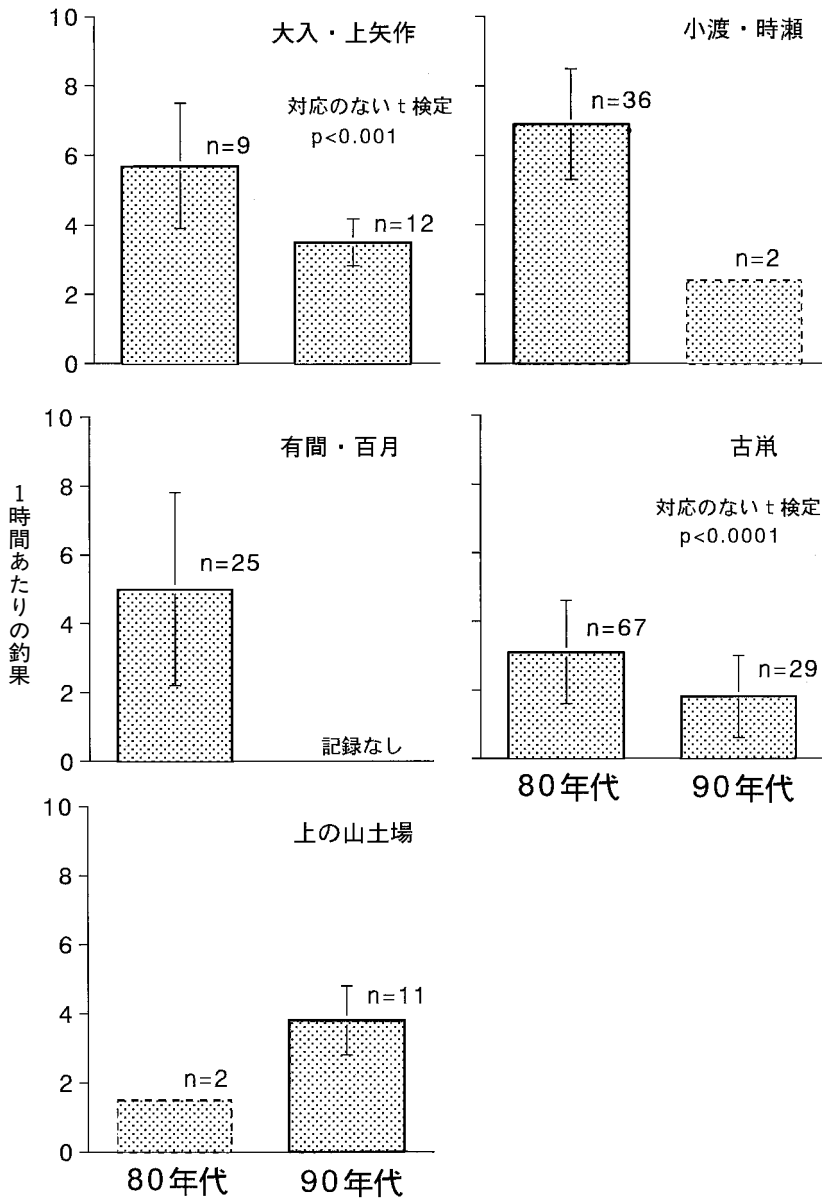


図3 1980年代と1990年代での釣果の比較

6. 考 察

アユがかかるときのアタリが変化したとは、著者だけでなく複数の釣り人が実感している。おそらく、アユが自分のなわばりを防衛する行動に何らかの変化が生じたのが原因と考えられる。

アユが釣れなくなった時期は、河床が固くなり、糸状緑藻が大発生した時期の後まもなくである。これらの変化に伴って、アユが藻を食べた痕跡であるハミ跡も減少している。同時期にアユの遡上数が減ったり、放流数を減らしたとの事実は報告されていない。この観察から推測すると、アユのエサの質が悪化したために、エサを防衛するためのなわばりの形成が阻害されてしまったのかもしれない。エサの藻類の種類と質の違いによってアユのエサへの選択性が変わるかどうか、踏み込んだ調査をおこなう必要がある。

古川地区で河床が固くなったのは、矢作ダムが造られて砂利の供給量が減少したのが主な要因と考えられている。糸状藻類の大発生を招いた要因として気になるところである。しかしながら、大規模なダムの影響がはるかに少ない豊川においても、古川で大発生する前年に、同様な糸状藻類の大発生が著者によって観察されている。そしてその年のアユ釣りが散々な結果だったとの記述もなされている。このことから、大発生の原因には河床の変化以外の要因も関わっている可能性があり、注意を要する。

図2において1990年代の釣果の減少が読み取られたのは、古川と大入・上矢作だけであった。だが、ハミ跡が減少したことや魚影が見えにくくなったことなど、記述されている内容から考えて、小渡・時瀬と有間・百月の両者とも、同じ頃に大幅に釣れなくなってしまったと推測できる。すなわち、90年代の減少は矢作川全域に生じた変化といえるだろう。原因の究明には広く流域全体を視野に入れた調査が重要といえる。

今回、釣果の違いとして、年代間の差とともに、場所による差や季節にともなう変化も見いだされた。特に、季節が進むほど釣果が増加する現象は釣り人の間でも広く知られた現象である。釣果の減少した原因ともどこかで関連しているのかもしれない。

上の山土場については、記録の中では「籠川からの豊富な砂利供給を受けること、下流部が水源頭首工の湛水区域になることなどから、常に魚影が認められる状態が継続している……」と90年代に入ってから例外的に釣れる場所として記されている。現場の調査にあたっては、比較する地点として活用できる可能性がある。

7. 今後の課題

今回の解析では、「大入・上矢作」に矢作川水系以外の結果も入ってしまっている。矢作川の矢作ダムより上流の地点のみで、グラフを作成する必要があるだろう。また、本報告では紹介しなかったが、豊川における釣果の記録がかなりある。他河川との比較として、解析していく必要がある。天野（1996）によれば、1994年の夏の渇水の際には、ダム下流の水域でアユ釣りが一時的に回復したことが記されている。1994年の矢作川での状況も、調べてみる

価値があるだろう。矢作川のアユ釣りの記録を探るのに有益な情報としては、この他にアユの入漁券の売り上げ台帳や、放流したアユの重量記録がある。これらの情報と釣果の記録とをつきあわせれば、釣果の記録がより確かなものになっていくであろう。いかに客観性を補強していくかが求められる。

8. 要 約

一人の釣り人が記してきた、矢作川における 1980 年から 20 年間のアユ釣りの記録をまとめた。釣りをしてきた筆者が感じた川とアユの変化として、1985 年頃よりハミ跡が減少、アユの掛かったときのアタリの変化、河床の変化が相次いで生じ、1990 年に糸状藻類の大発生と釣果の悪化に至っていると記されていた。一時間あたりの釣果を 1980 年代と 1990 年代で比較したところ、古川地区では平均して 4 割の減少が生じていることがわかった。同様な減少は、矢作川の流域の広範囲で起こっていると推測される。

Summary

The Yahagi River is one of famous rivers for angling of ayu *Plecoglossus altivelis*. However the performance of the angling is said to have dropped in recent years. In this article, records of ayu fishing after 1980 by an angler were summarized. As apparent changes in the river and behaviors of ayu, decreases in abundance of the marks of algae-feeding on rocks, changes of the feeling when ayu attacked the decoy ayu (Otori ayu) and riverbed armoring were occurred in around 1985. In 1990, filamentous algae developed abnormally and the fishing performance dropped remarkably. By comparing the number of fish captured between 1980's and 1990's, it turned out that approximately 40% of the performance was lost in the latter. Moreover, it is likely that similar aggravation occurred in the wide area of the watershed.

引用文献

天野勝則 (1996) 川漁師の語り／アユと江の川, 中国新聞社

[豊田市矢作川研究所研究員：〒 471-0025 豊田市西町 2-19 豊田市職員会館 1 F]